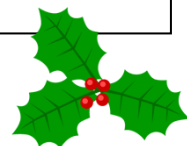


教職大学院 Newsletter

No. 177

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.1.19(公開版)



東京サテライトが支える宮古島市の教育改革 「学校拠点方式」の展開と進化

東京サテライト事務所副所長 特命教授 福島 昌子

1 東京サテライト事務所の特色

東京サテライトが開校し4年目にして、やっと東京事務所規定が整ったところです。これで東京という地に福井大学が根を確実に下ろし教師を支える学習支援組織づくりの基盤ができたといえます。この東京サテライト設置の目的は、福井大学にとっても初めての分校であり、福井大学連合教職大学院がおこなってきた「学校拠点方式の教師の学び」を東京という立地の利便性を生かし、関東や全国の先生方、学校、教育機関に向けて教師の新たな支援組織を展開することにあります。

その東京サテライトも令和3(2021)年度の開校2年目で、すべての学校種(国公立で、幼小中高校、小中一貫校、中等教育学校)の先生方がそろい、教師、管理職、教育行政の方々が学び、令和5(2023)年度までに在籍した院生は31名になります。また、令和2(2020)年12月に沖縄県宮古島市教育委員会と連合教職大学院が協定を結び、同市教委が東京サテライトを院生の拠点としたことで、2021年度から毎年2名の院生を派遣してくださっています。それもあり関東各都県はもちろんのこと、新潟県や富山県、沖縄県本島や離島の宮古島、多良間島、伊良部島から飛行機を乗り継ぎながら東京会場に一月に一回集まり、多様な先生方が学ぶ場となっています。そういう意味では、東京サテライトは文化・歴史・思想が異なる

地域の先生方が集まる教師の協働探究の追究ができる魅力ある拠点といえます。もちろん東京サテライトの院生さん一人一人が個性的で魅力あふれる先生方であることは言うまでもありませんが、その魅力を一段と引き上げてくれているのが沖縄の院生さんたちといえます。なぜならば、東京サテライトにいらながらも沖縄の離島の教育と関東、全国の教育を相互往還しながら学ぶことができるからです。

そこで、このNL177号では、宮古島と福井大学連合教職大学院が協定を締結するまでの道のりを繋ぎ伴走してきた者として、その時のことを振り返り、その様子をみなさまに改めてご紹介し、ここに記しておきたいと思います。

2 沖縄県離島での初の学校拠点方式の展開、市教委との協定締結

2020年12月17日、福井大学連合教職開発研究科(柳澤昌一(元)研究科長)と宮古島市教育委員会(宮

内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(6)
11月月間合同カンファレンス報告	(16)
トピック	(30)
実践研究 福井ラウンドテーブル案内	(31)

國博（元）教育長）とで宮古島市役所城辺庁舎にて連携協定締結式が行われました。協定締結の市教委の目的は、宮古島という離島から「教職員の資質能力向上及び相互の人的・知的資源の交流・活用を図る」「学校教育上の諸課題の適切な対応」「宮古島市の教育充実・発展に繋げる」ことを働きながら実現することにあります。締結式で宮國（元）教育長さんは、「市は学力向上、教職員の資質向上、小中一貫教育研究の充実を図りたいと考えている。そのためには教諭、管理職、指導主事など多くの研修派遣を行い連携協定を実現したい。研修生をどう募集するかという課題はあるが、しっかり取り組んで将来の宮古教育を整えたい」と期待を福井大学に寄せました。それに対し「これからの時代の要は教育。伝統的学習では立ち行かない。宮古島で教育委員会が基礎を支えながら連動してチャレンジし、共同で取り組むことで、一つの展開の切り口を与えることになり、新しいモデルをつくることになる。これからの時代の基盤は地域の知的力。提起いただいたことは、教職大学院の目指すことと一致している。協同で進めることを楽しみにしている」と柳澤（元）研究科長は述べられました。

この締結を機に学校拠点方式の学びが展開されることになり、①島内（宮古島、伊良部島、多良間島）各学校の授業・学校改革支援、②宮古島市教育委員会・沖縄県教育庁宮古教育事務所の教員研修会講師、③宮古島ラウンドテーブル（市教委と共催）、④大学院授業「夏季集中講座」を宮古島で開催（2021）、⑤連合教職大学院東京サテライト DEAL（ディープ・アクティブラーニング）教員研修（NITS、宮古島市教育研究所と共催）が行われるようになりました。これらの支援、連携に際しては、現在、宮古島市教育研究所長、連合教職大学院コーディネート・リサーチャーであり、（元）沖縄県教育庁宮古教育事務所長をされていた平良善信先生のご尽力なくしてはここに至らなかったといえます。感謝の言葉しかありません。

3 東京サテライトと宮古島がつなぐ教師教育

宮古島市教育委員会と協定を結び3年目を迎え、さまざまな「こと、もの、あり方」が見えてきたこともあります。情報社会の雑多な中で生きる関東の教

師たち、豊かな自然とユイマール精神の文化で生きる宮古島の教師たち。それぞれの良さと違いをどう双方で理解し合い生かしながら子どもたち、教師、学校を支え連携していくか。また宮古島の連携校（院生の所属機関、学校）に訪問する福井大学側の経費負担、ラウンドテーブル開催に要する費用の捻出、島外の参加者を募る困難さなど、距離に対する物理的な問題は避けられないことです。ただ、オンラインの普及により支援の在り方においては、対面、オンライン、ハイブリットでの学ぶさまざまな形式が取れたことで学校拠点方式の良さがより発揮できたといえます。特に、宮古島と東京のラウンドテーブル、DEAL（ディープ・アクティブラーニング）教員研修では、北は北海道、そして南は沖縄県離島の石垣島、全国から各回約80名の教師や教育行政の方々が研修会に参加され盛況で終えることができました。また、東京、宮古島とでは1,830 kmという距離の隔たりがありますが、このようなスタイルの教員研修によって教師が抱える課題や悩み、そして地域は違えど喜びは皆同じであることを再確認でき、教師の「学びネットワーク」の広がりを感じられた研修会だったといえます。

4 離島の教員研修の展開と進化

これまで離島の教員研修は、一方向的な一斉型または離島が故に動画視聴の教員研修が中心であり、協働探究の研修は未だかつて開催をしたことがありませんでした。しかも本教員研修のように沖縄県外の都道府県教員が集まり互いの実践を省察・共有し学び合うラウンド形式の教員研修は、先島諸島全域においても皆無でした。したがって、協働探究教員研修をめぐる資源に遠い地域である離島においても、教員研修の蓄積のある福井や大学の多い首都圏に限られたところだけではなく、新たな教師の学びを展開することを可能とし、日本全体の教師教育研修改革の進展を示唆するものといえます。そのためにも連合教職大学院東京サテライトの役割として、離島において学校拠点方式を生かし、東京と宮古島でラウンドテーブルや教員研修を継続的に開催し、そのネットワークを関東や離島から全国に向けて展開していくことが重要と考えます。

離島で協働探究教員研修を成功させるためには、ただ協定という橋を架けるだけでなく、双方が安心して渡れる頑丈な橋にすることです。そのためには教え合う縦の関係ではなく、お互いに学び合う横の関係にあること。そして、何よりも大切なのは島の子どもを、先生を、島の教育を自分事として捉え、その地の人たちと共にその文化、歴史、思想を大切にすることと私は思います。

最後に、わたくしのNL執筆定番としていつも述べている言葉で締めくくりたいと思います。東京サテライトの教職の協働探究「総合的な学習の時間」は、まだまだ続くよ、どこまでも。

多くの皆さまとかかわりながら教職を探究し学べることを大変ありがたく思います。感謝いたします。

・参考文献

福島昌子・平良善信・前田香織（2022）『教師教育研究 15号：東京サテライトにおける地域展開教員研修の歩み』、福井大学連合教職大学院

・一部引用

令和5年度日本教職大学院研究大会「実践研究発表」抄録より



インターンシップ・週間カンファレンス報告

生徒に寄り添う

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 福井大学教育学部附属特別支援学校

笹本 穰太郎

2023 年度があっという間に終わろうとしています。

私は、大学院で特別支援学校に通う生徒達にどのように寄り添えばよいのか、特別支援教育を深く学びたいという思いを胸に入学してから早くも9ヶ月が過ぎようとしています。

振り返ると、入学当初の私は学び方について、教えてもらうのだという受け身の姿勢のままでいました。しかし実際の講義は、話し合いや語り合いといった自分の事や実践を語る事ばかりで、ギャップを感じ戸惑いしかありませんでした。その上、私は話すことが苦手でした。4月、5月の金曜カンファレンス、月間カンファレンスは、グループで「話す」「語る」ことが中心。長期実践報告を読んで何を学び、何を掴んだのか、グループで何を話したらいいのかわか

らない、必死に読んで唯一「見取りが大事だ」という事が言えても、質問攻めを受けると頭が真っ白になり言葉が出てこない。しどろもどろになってしまい、「話す」「語る」ことが、さらに苦手意識を強めて、とても苦しかったことを今でも覚えています。

しかし、この苦しい状況を変えてくれた出来事がありました。私は現在、附属の特別支援学校のインターンシップとして通っています。ここでは、知的障害のある子供達が自立的かつ主体的に学び、日常生活で役立つスキルを身につけるために、「生活教育」を重要視した教育を行っています。ここでの経験も、当初、見取りや授業のねらい、支援方法についてわからない事は日常茶飯事でした。特に生徒達への支援方法に関して難しかった出来事がありました。ある一人の生徒は、作業時に報告することを苦手としてい

ました。私は、その生徒がどうしたら報告できるようになるのかと様々な声掛けをしたり、指示板を使ったりして試みましたが、どうしてもうまくいきませんでした。方法が見つからず、わからないことを毎日の記録として書きだし、メンターの先生や同期のインターンに話して整理していきました。少しずつでも聞いたことを言葉にして、次に金曜カンファレンスや月間カンファレンスで相談をしていきました。そして一つのアドバイスを受けました。それは生徒が報告することの価値を自覚していないのではないかということでした。私の考えには無かった発想でした。

今までの自分の支援方法は適切だったのかを考えさせられました。自分が良かれと思った声かけは生徒の心に響いていなかったのか、そして、生徒自身が自分にプラスになると思った支援方法こそが、実際

には生徒に寄り添った支援だったのではないかと、私の考えが変化していきました。また、この生徒の事を考えるにつれて、私自身の「話す」「語る」は、どうなのだろうかとも考えてみた時に、自分が感じたことや悩んだことを話す場所であるカンファレンスは、不安や疑問を解決できる意義深いものであり、「話す」「語る」ことの大切さや楽しさ、新しい視点の意見に触れ合えることの大事さに気づかされたのと同時に、苦手意識よりも「話す」「語る」ことの重要性が上回り、学び方への意識の変化も引き起こしました。

言葉で思いを表現することで、問題を整理し、新たな解決策を生み出すことにつながっていく。今後も「話す」「語る」カンファレンスの場で、自分ももっと成長できるように向上していきたいと思います。

インターンシップにおける成長

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/ 坂井市立丸岡南中学校 原 智徳

大学院も残り数カ月となった。インターンシップも始まってから 1 年半ほどが過ぎた。実際の教育現場に入り、自分の生徒に対する対応や授業に対する考え方が変わってきたと実感する。このようなことを実感するようになったのは、自分が想像していた教育現場と実際の教育現場のギャップが埋まってきたからではないだろうか。

昨年 1 年間は、とにかく学校現場に慣れることに必死であった。特に、私のメンターの先生は授業が上手である。そんな先生の授業を参観し続け、授業によって重要なことが分かったとを感じる。私は今まで、授業とは上手に教え、生徒に理解させることが重要であると感じていた。その理解の中で生徒が成長していくと考えていた。しかし実際は大きく違っていた。生徒は、授業におけるコミュニケーションだけでなく、部活動等を含めた学校生活全体で成長するのである。問題が起こって、指導した時だけでなく、日常

のさりげない言葉がけや態度が生徒の将来を左右することもある。そこで、一番重要であると感じたことは、授業が上手なことではなく、生徒との信頼関係を作ることである。これによって、先生が頑張っているから私も頑張ろうという姿勢や、指導をしたときにこの先生が言うことなら自分が悪いなどというように教育効果が上がっていくと思う。また、行事等において、自分たちが知らないところで先生たちが何を行っているかということを知ることができた。生徒が輝く場面を作り出すために、先生方が裏方として動いていること、準備していることがあるからこそ、行事等が成功するのであるということが分かった。昨年 1 年間は、これらのことが分かった 1 年間であった。

そして、今年に入り気づいたこともたくさんあった。学年やクラスによる雰囲気の違いや、問題が起こった時の対応、授業参観中に今まで見えなかった工

夫や糸などである。特に、今年に入って気づいたことは自分の成長である。昨年 1 年間に比べ、授業よりも生徒の様子を気にするようになり、机間巡視で生徒と話す機会が増えたと感じる。そして、生徒の前で話すときに、自分の話を伝えるだけでなく、生徒に問いかけを行うようになった。正直、昨年までは生徒とかかわるのはあまり得意ではなく、話しかけてくれる生徒に対してのみ対応していた。自分の中で、どこか他の先生に頼っている部分が大きかったと思う。しかし、今年は一人の教員として何かを任せられる機会も増え、より自覚や責任をもって取り組んでいた結果であると感じる。そこから、生徒への対応が変

化したのではないと思う。1 月には、私の 4 系における研究に絡めた実践を行う予定である。この実践は、このインターンシップの締めのような授業であると感じている。メンターの先生に成長を見せ、自分も成長を実感できるような授業としたい。

この 2 年間のインターンシップは、私にとって大きな経験となり、自分自身の成長に大きく関わったと感じる。残り数カ月となり、準備等も忙しくなるが、たくさんのことを学び、来年の 4 月に向けて準備をしていきたい。

カンファレンスを通して見えてきた「合意形成」

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

渡辺 昇希

金曜カンファレンス、月間カンファレンスともに後期のうちの半分に差し掛かっている。今回はこれまでのカンファレンスと名の付くものを通じて感じた事を述べる。

金曜カンファレンスではこれまで、これからどのような活動をしていくのか、幾度となく議論してきた。それぞれの院生は自分なりの考えを持っていて、私とは全く違う。しかし、全く違う考えを持つ人の意見を聞くことでそのような見方もあるのか、と刺激を受け、私の考えが広がったこともあった。もちろん逆の場合もある。1つの議題についていろんな角度から考えることによって1人で考える時よりさらに最善の解決策を考えることができる。このような点から、私は自分だけで考えるより、みんなで考えることの大事さを感じていた。

その一方で金曜カンファレンスにおいて私なりの不満も少なからずあった。それぞれの院生にはやりたいことや貫きたい考えがある。しかし、お互いに譲ろうとしない。自分の意見を出さず、他の院生の意見

を聞こうとしているように見えて、議論全体を通してみれば無意識に自分の意見を通そうとしていることもある。お互いに無意識に自分の意見を通そうとしていることに気づいていない。自分と意見が食い違う人がどうしてそのような意見を持つのか、聞こうとしないのだ。それは私自身も例外ではない。何か決めることがあって話し合いになると、どっちの意見を採用するか、となった時に何らかの話し合いがあって、結局どちらかが折れて、どちらかの意見がそのまま採用されて話し合いが進むことが少なからずある。もちろん、お互いが納得しあったうえで、誰かの意見が採用され、話し合いが進む場合もある。これが今の金曜カンファレンスの現状であるように感じる。

どちらかが折れて、どちらかの意見がそのまま採用されて話し合いが進んでいる現状について、もし意見が採用されたなら自分の考えや意見が認められたように感じる。私も金曜カンファレンスを通じて自分の提案が採用され、周りから認められた、これか

ら頑張ろうと思った経験があった。しかし採用されなかった方はどうだろう。その人の意見に納得できず、自分が今までこれまで考えてきたことは何だったのかと考えたまま、会議は進んでいくのではないかと、私は考える。

私はカンファレンスを通して話し合いの中で何か決めるとなった時に、それぞれの人がやりたいことや意見について、ある部分では譲り、ある部分では自分の意見を採用してほしいように働きかけるようにして、一つの案を作っていく。それが「合意形成」とは何か、という問いに対しての私の現時点での答えである。どんな人にも、自分の意見や考えを正しいと思うところが無意識にあり、「自分の意見を通したい」という想いが多かれ少なかれあることを金曜カンファレンスの運営や月間カンファレンスを行う中で感じたからだ。

インターン先の福井大学教育学部附属義務学校にお世話になっていることもあって、「協働」や「合意形成」という言葉によく触れる機会がある。しかし、これらの言葉を実現しようと思うと、思っていたより遥かに難しいことを金曜カンファレンス、月間カンファレンスを通して感じた。本当の意味での「協働」「合意形成」はもはや不可能なのではないか、とも考えてしまうのが現状である。しかし、これまでのカンファレンスを通して、「合意形成」の捉え方は変わった気がする。だから「協働」「合意形成」というものは本当の自分とはイメージしているものとは違うものであるのかもしれない。まだ卒業まで1年余り残されている。その中で「協働」「合意形成」とは何なのか、自分なりの答えを日々更新していけるように取り組んでいきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

「省察」と「対話」から生まれる「挑戦」

ミドルリーダー養成コース1年/ 宮古島市立伊良部島小学校 儀間 裕勝

教職大学院は不思議なところだ。月間カンファレンスやラウンドテーブル等では、様々な立場の方々とグループになり、その時々テーマや自身の実践、抱えている課題などについて話し合う。一見すると発言し難い場に思えるが、そこにはいつも「心理的安全性」があり、普段は口にしない自身の悩みや課題に感じていることなどを、洗い浚い話してしまうのである。そこで対話を通して、自身の実践を省察するための新たな視点を得ることで、課題解決や新たな実践に挑戦することができた。

教職大学院に入学し、早くも1年が経とうとしている。ここまでの学びと課題について振り返る。

まず、学びとして、11月の東京ラウンドテーブルにおいて、総合学習で取り組んでいる探究についての実践発表を行ったことが挙げられる。大学院で学び始めてから、「探究とは何だろう」と、いつも考えるようになった。本年度から異動した学校で、どうしたら子ども達を探究に向かわせることができるのか模索してきた。大失敗の実践もあった。それでも挑戦し続けられたのは、月間カンファレンスでのセッションでいただいた言葉があったからだと考えている。

7月のカンファレンスで、児童同士が学び合うコミュニティづくりや探究等の実践について、「何もかも上手くいかない」と、自身の悩んでいる課題を話した。その際、「上手くいっていないというのが、上手くいっているということなのではないか」と、アドバイスいただいた。「こういうところが上手くいっていないと話せるということは、それらの課題に気づくことができるということなので、これから対策していける。それは、逆に、上手くいっていると捉えることもできるのではないか」というお話だった。課題にぶつかったときに、この言葉を思い出す。今、総合学習で子ども達が熱心に取り組んでいる探究は、教師と児童が共に味わった失敗体験があったからこそ挑戦できた探究であると考えている。それを支えたのは、教職大学院での「対話」と「省察」に他ならない。

次に、私の中で大きな存在となっているのは、夏期集中講座3Cycleでの学びだ。教職大学院の夏には、地獄の3日×3日やってくるという噂があるのかなとか。それが夏期集中講座を指すものかどうかはさておき、私にとってこの3Cycleの9日間は、ここに書き表せないほど楽しいものであった。翌月も3Cycleやりたいと感じるほど、毎日がとても充実していた。Cycle1で読んだ「専門職として学び合う教師たち」は、私が目指していくところであるように感じており、Cycle2の「コミュニティ・オブ・プラクティス」もとても興味深かった。また、Cycle3では、自身のこれまでの実践について深く省察することができた。各Cycle3日間という限られた時間の中で、必死に取り組んだこれらの内容も本当に楽しいものであったが、私の中で夏期集中講座での学びが大きな存在となっている要因は、毎日の終わりに設定さ

れていた他の先生方との対話の時間である。ここまでの進捗や考えたことなどを話し合う時間であるが、同じ本を読んでも、それぞれの立場や経験、課題に感じていることなどによって見方が大きく異なっていた。私が特に気にせず読んだところに、こんなにも考えることがあったのかと、ホテルで本を読み返した。夏期集中講座は、今までなかった視点や気づきなど、多くの学びを得ることができたと感じている。

10月のカンファレンスで、「夏期集中講座で感じた楽しさを普段の現場で感じられないのはなぜか」と、問いをいただいた。これからの取り組む課題につながると考えている。

教職大学院で学ぼうと考えたきっかけでもあるが、「教師同士が学び合うコミュニティづくり」について課題を感じている。コミュニティをつくること自体が苦手なのかもしれないと、落ち込むこともあった。月間カンファレンスで話す中で、私と同じようにコミュニティづくりに課題に感じている先生方も多くいることが分かった。「まずは1人」を巻き込むところから地道に取り組んでみようとお互いに励み合ったことが、課題解決に向かう心の支えとなっている。課題解決の糸口は、まだ掴めていないが、何かきっかけはないかと常に意識している。「何も変えられなかったとしても、何かを変えようとした事実を積み重ねることは無駄にはならない」これも、カンファレンスでいただいた言葉である。

教職大学院で、他の先生方に大いに支えられながら歩んできた数ヶ月であったが、支えられるばかりでなく、私自身も他の先生方の支えとなれるよう、これからも学び、挑戦し続けたい。

学びを実践すること

ミドルリーダー養成コース1年/ 札幌新陽高等学校 号刀 悠貴

4月から始まった教職大学院での学びは、早くも9か月を迎える。得るものが確かにある。News Letterを執筆するにあたり、自身が提出してきたレポートを見直すと、稚拙な文章ながら、そこで学びを得ていることを実感する。毎月、カンファレンスにて、教育現場を異なる立場や視点、角度から見つめ、問いに向かっていく。この毎月バラバラのようで、それぞれの学びが確かに繋がっている感覚を覚え始めている。まだ正確に捉えることはできていない。

教職大学院での学びは「3つの種」から始まった。長期実践報告を読み、教師の「異動」が成す意味を考え、現象学と越境学習から学ぶ。そして教師のキャリアラダーを考えてきた。

並行して、学校で実践も行った。その一つが、「高校リーダー研修」だ。これは、札幌市内の高校生、教師に集まってもらい、「私たちの中にある近未来の学校」をテーマにワークショップを行った。今まで校内完結のワークショップは行ってきたが、複数校を交えて自身が主催で行うことは初めてだった。このワークショップを行いたいと考えたきっかけは、2019年の奈良ラウンドテーブルだ。初めて参加したあの日の衝撃と感動は今でも忘れない。見たことのない世界がそこには広がっていて、自分の教育観が大きく変わった日でもあった。あのラウンドテーブルは、集まった生徒たちが学びを得ることはもちろんあったが、引率教師にとっても学びがあるように設計されていたことが印象的だった。むしろ教師の学びが多い。そして、そこで学びを得た教師が、自校に戻り、得た学びをそれぞれがカスタマイズして学校に還元する。そうやって学校から地域を変えていく壮大なワークショップの意図に触れた。当時是一个のプロジェクトを何とかしたいとしか考えていなかった私にとって、その大きな考え方に惹かれた。力を身につけ、自身でもこうしたワークショップを開き、実践コ

ミュニティを作り、北海道の教育を良くしていきたいと思っていた。その一歩を進めることができたのが、今回の「高校リーダー研修」だ。

2019年から4年の歳月と、職場の異動、大学院の学びが重なって実現したことだ。教職大学院に入学するまでの4年間で、奈良や福井のラウンドテーブルに参加する中で、自身の成長や学びだけでなく、それを職場にどのように還元していくのかを考えられるようになっていった。自分だけが参加するのではなく、同僚も一緒に連れて参加するようになった。そして、校内に感度の高い教師を増やし、変化を促していく。

職場を異動し、以前より新しいことに挑戦しやすい環境を得た。さらに大学院で実践的な学びを得て、どんなワークショップにしていけばいいのか、何のために開催するのかを何度も自身に問う。開催することを目的にするのではなく、実施したその先に何を描くのか。

こうして開いたワークショップは、生徒同士、生徒と教師で起こる化学反応が様々起きた。とても素敵な時間を過ごす事ができた。会場に来てくれた生徒や教師がインフォーマルに繋がり、自身たちでコミュニティを作るきっかけを作れた。

しかし、課題もある。一つはこのワークショップのデザインは2019年の奈良ラウンドテーブルを模して行ったものだ。元からあった素晴らしい問いの設計があったからこそ、今回のワークショップは成功した。この設計を自身で行うことは非常に難しい。ただ、毎回を自身でゼロから設計する必要はない。模してカスタマイズすることは、時間の削減になる。しかし、私自身が今回のような設計を立てる力は身につけていない。模するにしても、自身でその力は身につけていたい。

また、ワークショップでファシリテーションをする中で、参加者に良い問いやパスをする難しさも痛感した。福井ラウンドや奈良ラウンドでは、常に良質な問いがなされ、対話が深まっていく。参加者から設計者になり、違った景色を見る事ができた。

このように、学校現場と教職大学院の学びの往還、記録を残すこと、振り返り、省察をすること。カンファレンスだけでなく、働いている毎日が学びとなり、生きていく。この学びを、北海道に還元できる力を身につけていきたい。

「認められる」経験を大切に

ミドルリーダー養成コース2年/ 福井大学教育学部附属幼稚園 村橋 義人

気が付けば教職大学院で過ごす時間も残りわずかとなった。それは同時に「福井」の地での生活がもうすぐ終わろうとしていることを意味している。これで家族とゆっくりと過ごすことができると思うと嬉しくなるが、福井を離れる寂しさも少なからず感じている。それほどこの2年間で、多くのものを私に与え、価値ある時間であったのだろう。

「主体性ある保育とはなんなのか」「職員の協働性を高めるためには」そんな思いを抱き、私は福井にやってきたのだが、「幼稚園」「教職大学院」という初めての環境に、不安と緊張しかなかった。しかし実際にその2つの環境が、私に与えてくれてものは語り合いの心地よさであった。幼稚園の金曜カンファレンス、教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブルなど、どの語り合いの場においても、全員がこんな私を受け入れてくれたのだ。言葉足らずな私の話を、誰一人否定せず褒めてくれる。保育者として働き始めた頃に抱いていた、グループでの話し合いへの苦手意識。そんな苦手意識は、この福井の地での経験により、瞬く間に私の頭の中から吹き飛ばされることになった。多くの先生に褒められ、もっと頑張ろうと何度も思い、すぐに私は「語り合い」の虜となった。

去年の夏期集中講座でコミュニティオブプラクティスを読んだことがきっかけで、「語り合い」の良さを高浜町立保育所の先生たちに知ってほしいと思い、新たなコミュニティを発足させた。そうすることで職員間の協働性が高まるのではないかと考えたから

だ。この時の私は語り合いの本当の良さに気が付いていなかったのだが、今年になり自身の保育を振り返ったことがきっかけで、その良さに気が付くことになった。

附属幼稚園には「みんなの時間」と呼ばれるものがある。好きな遊びを終えた子供たちが、クラスごとに集まり、その日の遊びの中の出来事や、おもしろかったこと困ったこと、作った作品などについて教師と一緒に話し合い、遊びを振り返っていく。みんなの時間では新しい遊びのアイデアが生まれたり、みんなと同じ遊びを経験してみて楽しい思いを共有したりするなど、私にとっても子供たちにとっても大事な時間である。この時間は子供たちにとって「語り合い」の一つなのだと私は考えていた。しかし、子供たちにとってどういう意味をもつのかということまで考えることができていなかった。園内研究会で「みんなの時間」について考える日も多く、私は自身のみんなの時間を振り返るとともに、子供たち一人一人にとって「みんなの時間」にはどのような価値があるのかを考えていくことになった。

集まらなければいけないから集まるのではなく、集まりたいから集まる、そのように子供たちが思い集まることで、「みんなの時間」という集団の場がより深い学びの場になっていくと思うが、子供たちが集まりたい「みんなの時間」とはなんだろう。片付けになった時、「まだ遊びたかった」子供たちが思うのは自然なことだろう。では教師として、私ができ

ることはなんだろう。そう考えていくうちに、まずは子供たち一人一人の声や想いをしっかりと受け止めてあげることが、大切なのではないかと私は思うようになった。そして毎日の保育でそれを実践していった。すると今まで聞いたことのない子供の呟きを聞くことになった。ある日の降園時間、お迎えを待つ一人の女の子が「先生、今日みんなの時間するの忘れてたよ」と私に言った。この日は行事があり、みんなの時間ができなかったのだが、なぜこの子がそんなことを言うのか分からなかった私は「ほんとだね。また明日しようか」と声をかけた。また別の日、みんなの時間に遊びの振り返りをせずに、保育室の壁面製作を行ったのだが、男の子が笑いながら「先生、またみんなの時間忘れてるよ」と私に言った。なぜ子供たちがこれほどまで、「みんなの時間」をしていないことを私に伝えてくるのか、不思議だったので、私は一度子供たちに聞いてみることにした。「なんでみんなの時間がない時に先生に言うの？」と私が尋ねると、「だってみんなの時間したいんだもん」とほとんどの子が答えた。子供の口からこのようなことを聞いたのは、初めての経験であったのと、「みんなの時間」について試行錯誤していた中での、子供たちの反応だったので、この時は本当に嬉しかった。

私が子供たち一人一人の姿を「みんなの時間」の中でしっかりと受け入れることで、子供たちは「認められる心地よさ」を感じていたのではないだろうか。それが、子供たちが感じる集団の場の「価値」になるのではないだろうか。遊びが終わっても、話を聞いてもらいたいから喜んでみんなの時間に参加する。そのように主体的に参加するみんなの時間では、無自覚のうちに友達や保育者の声に耳を傾けることになり、自然とそこが深い学びの場になっていくのだと

私は思った。そしてそこで学んだことが次の日の「好きな遊び」の中で発揮され、また新たな学びを生むことに繋がる。まさに「主体的」で「協同的」な子供の姿がそこにはあった。だが、私がここで感じたのは、大人にとっても子供にとっても、「認められる」という経験が大事なのだなということであった。教職大学院の語り合いの場での私の経験と重なったのである。

だが、ここでひとつ私は大きな間違いをしていたことに気付くことになった。それは、自身の発足させたコミュニティの場において、集まってくる先生たちにとって「価値」を考えていないことであった。私は自分だけ福井の地で、褒められ、認められ、勝手に語り合いの良さを感じていたが、高浜町立保育所の先生たちは、過去の私と同じように苦手意識を持っているかもしれないのだ。だからまずは高浜町立保育所の先生たちが、その場において「認められる」という経験をできるように、場を設定したり、ファシリテートしたりできるように、場のもち方を考えるようになった。そうすることで、少しずつ「語り合い」に心地よさを感じる先生が出てきて、積極的に語り合いに参加するようになるのだと思う。そうすることで、子供たちの「みんなの時間」と同じように、その場が深い学びの場となるのだろう。

集団の場において、誰かに認められるという経験を大切にすることで、子供も大人も主体的で協働的な保育になっていくのだと学ぶことができた。このことは、「福井」の地を離れても決して忘れることはなく、「語り合い」が多くの先生にとって心地よい学びの場となるように、今後も多くの先生と語り合いながら試行錯誤していきたいと思う。

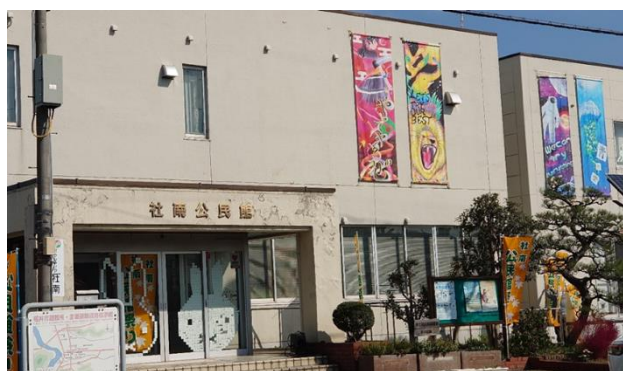
キャリア教育の充実を目指して

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 福井市至民中学校 秦 計代

11月14日に、全国キャリア教育・進路指導担当者等研究協議会で、至民中学校の取組をお話する機会がありました。その一部をご紹介します。

至民中学校のスクールプランの柱は、キャリア教育とシティズンシップ教育です。至民中学校には、教科センター方式、異学年クラスター、地域連携の3つの特色ある学びがあります。生徒たちは、異学年、地域を始めとする多様な社会の人々、そして、教職員から様々なことを学んでいます。至民中学校での生活は、キャリア教育そのものです。

学校祭で各クラスターが制作した団結旗は、1年間、生徒全員が毎日通る吹き抜けの葉っぱのホールに掲げられます。また、卒業後には、もう一度社南公民館に掲げられます。この「団結旗文化」も、大切なキャリア教育です。



令和2～4年度は新型コロナウイルス感染予防のため、職場体験活動を中止する学校が全国的に大幅に増えたそうです。その中で、至民中学校は、方法や内容を工夫して、職場体験活動を継続してきました。

令和2年度は、オンラインで職場体験活動を実施しました。福井市キャリア教育プログラムを活用し、キャリア教育コーディネーターが連絡・調整を行った結果、生徒約120人に対して、8人の事業者をオンラインで結ぶことができました。

令和3年度は、職場体験活動に向けて、事前学習として福井市キャリア教育プログラムを活用しました。生徒144人に対して、キャリア教育コーディネーターの連絡・調整により24人の事業者の方が集まってくれました。

このように事前学習を重ねていったのですが、新型コロナウイルス感染が拡大し、10月実施を3月に延期しました。ところが、再び感染が拡大してしまい、結局、職場体験活動は中止となってしまいました。

令和4年度は、職場体験活動を「至民型ミライプロジェクト」の中の活動として捉え、学びを積み重ねていきました。その中では、調べ学習や発表活動に加えて、キャリア教育コーディネーターによる講義やグループワークも6回実践されました。

R4年度 職場体験学習に向けて

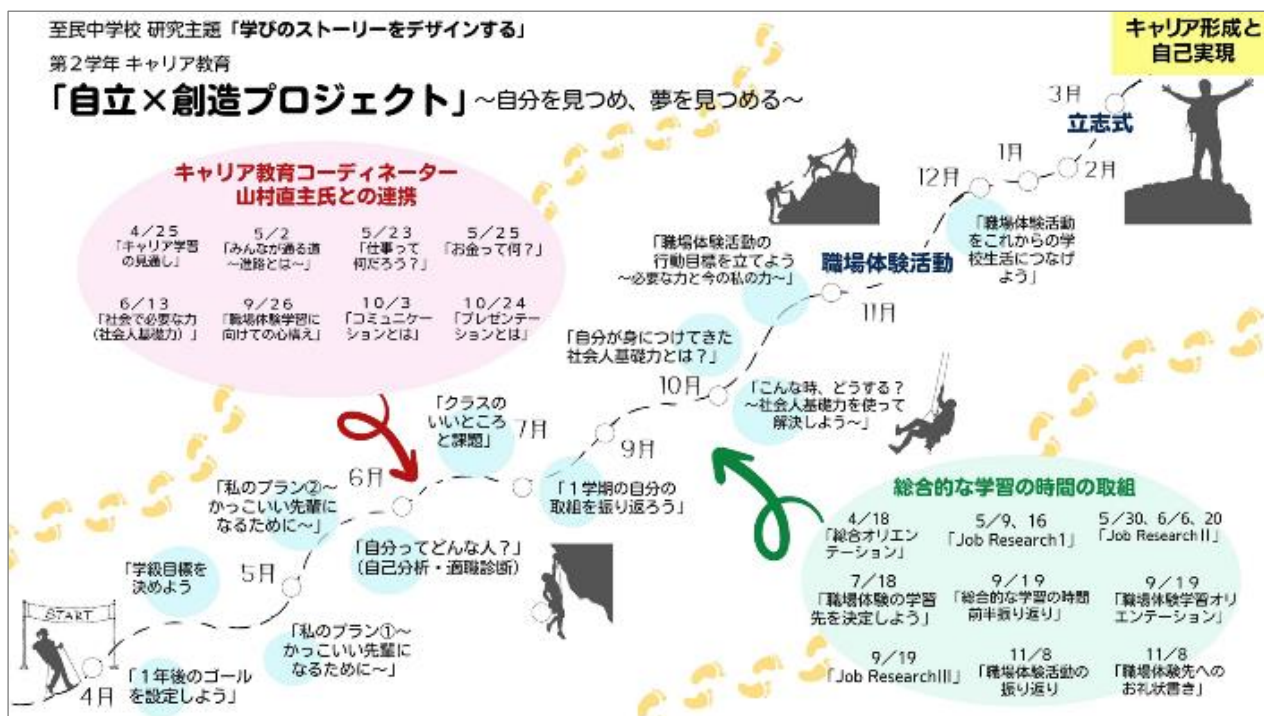
調べ学習・発表活動	キャリア教育コーディネーターによる講義・グループワーク
・ Job Research I (職業調べ) ・ 自己分析・職業適性分析 ・ Job Research II (産業調べ) ・ 職場体験学習先の情報収集 ・ 履歴書の作成	・ 仕事って何だろう? ・ お金って何 ・ 社会で必要な力(社会人基礎力) ・ プレゼンテーションとは? ・ 職場体験学習に向けての心構え ・ コミュニケーションとは?

令和4年度 全国キャリア教育・進路指導協会 福井県研究協議会

また、マスクを外す昼食をはさまない半日×2日間の実施、職場が遠方の場合でも公共交通機関を使わずタクシーを利用するなど、感染予防対策を工夫し、生徒126人が47事業所で、職場体験活動に取り組むことができました。

本校の研究主題は「学びのストーリーをデザインする」です。教員が生徒の学びを予想して授業をデザイン(単元構成)し、その学びを的確に見取り、省察、修正を加えながら、ストーリーを編み上げていくことを目指して研究実践に取り組んでいます。

令和5年度の第2学年は、1年間のストーリーを編み上げました。



学びの見通しを知った、多くの生徒たちが示した「自立」「創造」という言葉を使い、プロジェクト名は「自立×創造プロジェクト ～自分を見つめ、夢を見つめる～」と決め、学びのゴールを「立志式」とし、「職場体験活動」は通過点となりました。

キャリア教育コーディネーターによる授業は、8回に増えました。その中で教えていただいた、経済産業省提唱の「社会人基礎力」について考える活動に時間をかけて取り組みました。

まずは、小学校からのキャリアパスポート等をふり振り返り、自分はどんな社会人基礎力を身につけてきたか考えました。次に、体験活動を行う事業所では、どんな社会人基礎力が必要なのかを考えました。その後、自分を生かすための行動目標を考えました。行動目標を考える授業は、10月20日の公開研究発表会で公開いたしました。

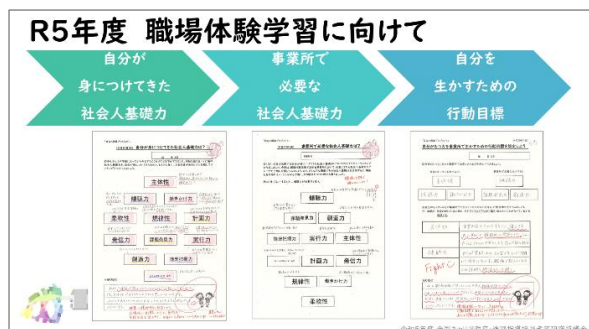
事業所の方に渡す名刺の裏に、自己PRを書く活動がありました。テアトルサンクは映画館です。警察関係に就きたいと希望している生徒が、映画館での職場体験活動で、コミュニケーション能力を学びたいと書いています。

自己PR

将来つきたい職業は、警察関係です。
テアトルサンクでは、どんな相手でも
話せるようになるためにコミュニケーション
能力を学ぼうと考えました。

今年度の職場体験活動は、活動することだけが目的にならず、活動を通してどんな力を身に付けたいのかと生徒自身が考えた「資質・能力ベース」の学びにできたと思っています。

「社会人基礎力」とキャリア教育の4つの基礎的・汎用的能力や「至民型キーコンピテンシー」との関係を考えていくことが、今後への課題です。



活力を与え合うシステムの中で

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 福井県立美方高等学校 岩本 守聡

私は事前研修を含めて約1年半、ここ福井大学教職大学院で学ばせていただいている。昨年、2月ラウンドテーブルでの1時間の発表や、ふくい教育フォーラムでの発表を経験させていただいた時は、人前で自分の実践について長時間話すことは初めての経験だったのでとても緊張したが、2年目に入りかなり慣れてきたと思っている。全く初めて出会う方々と、私の実践を聞いてもらいつつ相手の実践に聞き入り、お互いに助言をし合うカンファレンスは慣れてくるととても楽しい時間で、知り合いも増え、最近では研修を待ち望んでいる自分があることに、少し笑みがこぼれるほど不思議な感じがする。なるべくなら出張に行かず校内の仕事を第一にしたかった私が、自分の世界を広げることに積極的になっていることに気づき、たまの出張もいいものだし大事だなという感覚に変わりつつある。自分の過去を振り返って省察することと、自分のいる環境とは違う場所で頑張っている方々の話を聞くことは、今の私に活力を与えてくれ、私の成長を促してくれる。そして、まだ見ぬ未来の実践の輪郭を私に与えてくれる。今の時代を生き、苦労をしながら歩んでいる方々の言葉はこれほど深く心に刺さるのだということを、毎月のカンファレンスで学ばせてもらっている。

私が今年、最も自分を変革できたと感じた瞬間は、8月の夏期集中講座のサイクル3での学びと話し合いの時に訪れた。『学習する組織』という本を読みまわす中で、私が過去に立ち上げた実践コミュニティがなぜ継続できなかったかの理由について、心から納得できる答えに行き着くことができたからだ。また話し合いの中で、同じ本を読んで語り合っても、その捉え方が年代によって、また経験によって全く異なっているという実体験ができたことも、私自身の学ぶ意欲につながっている。分厚くて難しく、決して自分からは購入できない本であったが、私は「理論書」というものの持つ魅力を改めて知った。また、

その本に掲載されていた「自己マスタリー啓発ワーク」に従って、自分が本当は何を望みどんな欲求を心の奥に持っているのかを明らかにしようとした。しかしそのワークは一人で行うことができなかったため、コーディネーターの富永先生にお世話になり、ワークに沿って投げかけて下さる様々な質問に直感で答えていく中で、私はどんどん自分の心にかかっている雲のようなものが晴れていく経験をする事ができた。自分自身が日々の生活の中で忘れかけていた、理想のような願望を再確認することができ、そこに向かうための方法が決して不可能なことではないことを確認できたのだ！この経験は、私にとってとてもとても大きなものだった。

未来に存在している理想の自分が具体化されると、人は現状からさらに成長しようとする力が自然に湧いてくるものである。私は半分以上書き進めていた自分の長期実践研究レポートを、もう一度新しい気持ちで読み返し、修正する試みを実践中である。ただ単に私の過去の実践を物語風になぞるだけでなく、この実践を読んでくださった人が少しでも自分自身の分岐点に気づき、それぞれの奮闘期をどのように捉え、人との関わりの中でどう乗り越えてきたか、乗り越えられるのかを、自分と重ねて読むことができるかどうかという視点に立って書き綴ろうと考えている。私の経験は私だけのものであるが、その経験から学んできた知恵は人に分け与えることができるものだ。私はそんな知恵をたくさんこの教職大学院でいただいていた。今度は私の過去を媒体にして、いただいた知恵をお返しする番だと考えている。まだまだ道のりは遠いが、少しでもそんな思いが伝わるような実践研究レポートに仕上げる事が、今の私の目標であり、私自身の理想に近づくための願望の一つである。

今年度で卒業してしまうことは名残惜しくもあるが、たくさんの方々から教えていただいた多くの勇氣ある実践が、今の私の心の中には息づいている。教職大学院の門を叩く前は、自分自身に行き詰まり限界を感じることも実際にあった。実践コミュニティを継続できなかったという負い目を理由がわからな

いまま感じ、やる気が湧いてこない日々もあった。しかしここでの学びはそんな心の靄を見事に払ってくれた。この心に新たに根付いた宝物を胸に、そして私の理想を現実にするために、これからもさらに邁進していきたいと思っている。

大学院で学んだこと

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 福井県教育総合研究所 水澤 紀子

昨年度、県のマネジメント研修を受け、福井大学での教職大学院の話を聞き、もう一度学び直してみよう、という気持ちと、1年で終わるならやってみようかなという軽い気持ちで、始まった教職大学院での学びでした。

昨年度は、集中講義やラウンドテーブルを経て、いろいろな校種、職種の方の話を聞いて、刺激を受け、勤務校で、実践コミュニティも立ち上げました。大がかりなものではなくても、学びを生かして、実践している感じが少し持つことができ、うれしく思っていました。そして、今年度は、こんな風にしようという自分なりのビジョンももって臨みました。

しかし、今年度は予期せぬ異動でした。しかも、学校現場ではなく、研究機関への異動ということで、一気に自分の中でのビジョンは崩れ、どんな実践をすればいいかに悩み、大学院で学ぶのは今ではなかったのかもしれないという思いの中のスタートでした。

今年、福井県教育総合研究所の教員研修課に配属されて、主に初任者研修を担当してきました。研修の運営をしたり、受講の管理をしたりと昨年度までしてきた仕事とは全く違う仕事でした。自分の頭の中で思い描いていたようにはうまく運営がいかず、しまった、と思うことが多々ありました。うまくいかない仕事で、落ち込んでいた私を救ってくれたのは月間カンファレンスでの学びでした。カンファレンスで聞く、ストレートマスターの院生の話は初任者の先生とも重なり、率直な意見を聞くことができ、若手

が感じていることを知ることができました。また、同じ立場である研修機関の先生方とのグループでは、私の話に共感してもらったり、話を聞いたりすることで、重かった心が少し軽くなりました。そして、ファシリテーターに入っていた先生方からは、私がどうすればいいか悩んでいたことの解決の糸口を与えてくださいました。

また、今年が一番うれしかったことは、昨年度立ち上げたコミュニティが今年度も引き続き行われたことです。今年度、理科の小教研での発表があったので、昨年度から、理科の実験を行うことを中心に実践コミュニティ「ちょいラボ」を立ち上げました。日頃の理科の授業に困っている先生や理科専門の先生も一緒に、子どもの気持ちになって、実験をしたり、解説が入ったり、そして、理科以外の話もしたりとするコミュニティでした。日々の忙しさから、できた回数は少なく、自分の中ではあまりうまくいかなかったコミュニティだと思っていました。しかし、それが継続していたのです。また、理科の小教研の発表で、「ちょいラボ」について資料に入れたところ、指導主事の先生から全国の指導主事連絡協議会で紹介してもらい、いかとの連絡を受け快諾しました。12月に入ってから、「今度、ちょいラボするので、参加しませんか。」との誘いを受け、参加させてもらいました。

夏休みの集中講義で読んだ、「学習する組織」の中のビールゲームのように、成果が表れるのは時間がかかるということを体感しました。そして、いろいろ

と考え、ぐじゃぐじゃだった私の頭の中がすっきりしてきました。いつも、成果をすぐに出したい、せっかちな私ですが、時間の経過とともに遅れて成果はやってくるのだから、何ができるかではなく、今できることをやろうと思い始めました。ところが、長期実践報告書に向けて、整理して、まとめようと思っても、今度は文字に起こすのが難しい。浮かんでは消え、書いては消しの中で、どう言語化していけばいいか悩んでいます。

しかし、今年度当初に感じた、「今ではない」が「今だから」に変わっていきました。そして、大学院での学びが私の1年を支えてくれたのだと改めて感じました。大学院での学びもあとわずかになってしまいましたが、楽しんで終えたいと思います。

2年目のストーリーなど

学校改革マネジメントコース2年/ 練馬区立開進第二中学校 中野 麻委

11月27日、東京都教育委員会人権尊重教育推進校としての研究発表が終わった。

たまたま、教職大学院の2年目の終盤に研究発表の時期が重なったこと、2年間で行うはずの研究を、諸事情により1年間でまとめ上げなくてはならなくなり、管理職である自分が研究の運営に深く携わるようになったことなどが重なり、2年間の学びの成果は、全てこの研究発表に注がれることになった。そのストーリーを少し紹介する。

今年度、従来校務分掌として位置付けられていた研究推進委員会を、実践コミュニティを基盤として行うこととした。理由は単純で、その方が小回りが利くと思ったからである。

自由な発想で意見を出し合う中で、コアメンバーの先生から、そもそも研究主題である「自己肯定感を高め、多様性を認め合う」力が本当に本校の生徒に足りないものなのか、という意見が出された。

2年間の研究の半分以上を過ぎたところで、「研究主題が主題として疑わしい」という意見は、通常であれば聞き流されてもおかしくないのだが、そこは実践コミュニティのよいところで、「それならば生徒たちに意見を聞いてみたいね」ということになり、最終的には、教員と生徒が同等な立場で同じテーブルに

つき、本校の人権教育をどうしていくか話し合うまでに発展した。

当初、教員の研究の場に生徒が参画することに対し、(自分たちで提案しておきながら)本当にそんなことをしても大丈夫なのかとコアの先生たちも一抹の不安を抱いていたようだが、奈良のラウンドテーブルや福井のラウンドテーブルで生徒とのセッションを経験していた自分は「とりあえずやってみたら」と迷うことなく背中を押すことができた。

また、研究を進めていくうちに、「多様性を認め合えるような話し合い活動を展開するには？」という問いに行き当たった。これも、生徒からの「授業中の話し合い活動は、実は話し合っていないことが多く、積極的な人の意見がそのままグループの意見として採用される」という意見を汲んでのものだった。コアの先生たちもこれには頭を抱え、次第に「そんなことを言われても、打つ手がない」とネガティブな意見を出す先生も現れた。

それでも、「それこそ今、賛否両論様々な意見が出ている状態だけど、それでも話し合いが進んでいるのはなぜ？」と先生たちに問いかけると、「話し合いを回している人がいるから」「それなら、生徒の中にもファシリテーターを立てればよい」という案が出

された。案を出したのは、件のネガティブに傾いていた先生である。こうして、「生徒たちの話し合い活動の中にファシリテーター役を立てる」という、学校全体で目指す方針が固まった。

先生たちは、教職大学院に在籍したこともなければ、ラウンドテーブルに参加したこともない。今までの校務の中で、ファシリテーターというものには無縁だっただろう。そういう先生たちから、「ファシリテーターを立てる」という案が出てきたのは驚きであった。また、授業改善について、今までであれば「発問を工夫する」とか「全教科で一斉に取り組む」など教師側が改善する案が出ていたと思うが、「生徒たちの力で授業を良くしていく」という発想は、まさに、生徒が研究に参画したからこそ生まれてきたアイデアであると考え。

自分自身が、教職大学院 2 年目として心掛けたのは、実践に持続性をもたせるため、自分が前に出すぎないということである。自分が旗を振るのではなく、

要所所で先生たちの背中をそっと押していこうと思っていた。実際に今回、組織が新たな挑戦に進んでいったのを目の当たりにし、「学校改革マネジメント」とはこういうことを指しているのかもしれないと思った次第である。研究の詳細、その後の紆余曲折は、長期実践報告に記したいと思う。

蛇足であるが、私はこの原稿を、ワーナーブラザーズスタジオツアー東京—メイキング・オブ・ハリーポッターで書いている。教職大学院 0B のポーリン先生がそこで公開授業をされたのを参観した帰り道である。まさか、勤務校から徒歩 10 分足らずのところ、0B の方が活躍しているとは思ってもみなかった。また、日頃、学校に届けられる研究発表のチラシで見知った学校名を見つけると、研究内容にとっても興味をそそられる今日この頃である。

2 年の期間が修了しても、教職大学院での縁を大切に、他校の実践に対してもアンテナを高くしながら、学び続けていきたいと思う。



11 月月間合同カンファレンス報告

気づき、考え、行動する。

授業研究・教職専門性開発コース1年/ 岐阜聖徳学園大学附属小学校 帯川 夏穂

教職大学院に入学してから半年が過ぎ、今年度 5 度目の月間カンファレンスに参加させていただきました。様々な実践を聞くことができたり、それから自分自身の思考を認知することができたりする月間カンファレンスは価値ある時間であり、福井まで 2 時間半かかる道のりも短く感じるようになってきました。

1 つ目のグループセッションでは他校の研究から学び、支えることで得た経験を語り合いました。自分の過去を振り返ると、2 校の研究集会への参加や、夏期集中講座にて伊那小学校の実践記録を読む程度でしか他校の研究を学んだことがありません。しかし他校の研究を学ぶことや支えることは、間違いなく今現在でも卒業後も自分自身を成長させることにつながるという確信をもつことが出来ており、「今後自分はしたら他校と関われるのか」という未来を考えるきっかけになりました。なぜこのような考えになったかという、私のインターンは私立の小学校であり、他校や周辺の公立小学校との関わりはあまり見られないからです。授業進め方や施設環境、カリキュラムなど独自だからこそ生まれる魅力を発信することはできますが、週に 1 度行われる木曜カンファレンス（岐阜拠点）では、同じ附属小学校・中学校の仲間と語り合っているため、公立の学校の現状を聞くことができるのは月に 1 度の金曜カンファレンスのみ（福井拠点）になります。木曜カンファレンスでは同じ系統の学校で、教科を越えて教材研究や授業研究を行い、金曜カンファレンスでは異なる系統の学校の様子を知ったり自分たちの知識を提供したりして、公立・私立ともに一緒になって、お互いに学びあえる時間にしていきたいです。

2 つ目のグループセッションでは、同じストレートマスター同士で授業実践や探求の過程を語り聴き合いました。長期インターンやカンファレンスから感じたことから、「なぜ自分はそう思ったのか」と問い続ける「省察」が今後の自分の糧になるという可能性を感じることでできた時間でした。この考えの道筋は、長期実践報告書の資料となることも分かりました。今回のカンファレンス例えば、授業中に感動した場面に出会えた時、自分は何故それに感動したのか、どんな経験を経てそこに感動したのか考えていくと自分自身の理解や他者の理解、指導力を高める上でのヒントになり得るという話になりました。

そこで思い浮かんだ私の体験を述べると私はここ数か月ほどインターンがつらいと感じていました。その原因を解消したく自分の考え方と向き合った結果、「頑張らなきゃいけない」という考えがあることが分かりました。更になぜその考えが生成されるのかという原因を探ると、家庭環境、部活動や学校生活などで完璧を求められ「頑張らないことが苦痛だ」という考えになっていることに気づくことができました。けれど日々理想には足元にも及ばない日々を過ごすうちに教師という立場が億劫だと感じてしまっていたのだと思います。

私は 11 月に、音楽（前 8 時間）の授業実践を終え、実践と自己を振り返っています。ここでの振り返りが長期実践報告書の資料となるよう前述したように自分を自分で省察したり、仲間に話を聞いてもらったりして、主観的・客観的に自分の現状を記録していきたいです。そしてまた新たな課題に気づき、より良い自身の指導力や教育観を高めるために省察的に考え、行動へとつなげていきたいです。

他校から外国にルーツを持つ子どもへの支援

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

劉 靖宇

気づいたら、大学院での学びはもうまとめの時期に入ってきた。この一年間で何を学んでいた、これから何を実践していくか、まだはっきりは言えないが、毎週のカンファレンスや毎月のカンファレンスなどで、他の院生や先生たちを話し合っただけの実践の取り組みを聞いて、毎回毎回新たな知識や新たな視点を得ると感じていた。

教育実習のとき、初めて中国からの転入生に出会った。全く日本語が話せない彼はお勉強ができず、友だちもできなかった。さらに、習慣文化の違いや言語の違いに原因するコミュニケーションの問題やトラブルなどが起こってしまった。そのような経験があったから、教育実習を終わったあとすぐに日本語・学習支援ボランティアを登録した。

グローバル化により、特に新型コロナウイルスは基本的に収束したため、これから外国子どもの編入も増加していくと予想したので、先月に中華学校に参観した。

日本の中華学校は海外の日本人学校と全く違うことに気づいた。海外の日本人学校は日本国内と変わらず、日本の教育を受け、高校や大学は日本に戻って進学する人が多い。しかし、中華学校は日本の学習指導要領を参照し、日本の教科書で同様の内容を学習している。また、バイリンガル教育と生活環境が海外居留地のことを配慮し、多言語教育を重視しており、

両国の文化・社会・生活などを理解したうえ、異なる価値観を持ち、思考のスイッチを自由に切り替えることができる。

日中交流の歴史や文化・習慣・政治などの違いを含めて社会科につながる学校自身が編集された本を使い、特別な科目「文化常識」がある。この科目から、社会科より深く知識を学んだり、異文化を理解したり、さらに日中両国の立場から同じ事件についての考えを生み出し、深く考えることができる。

また、日本語指導については、中華学校では日中両国のことばを使い、日本語で聞いて日本語も中国語も答えられるし、日本語で聞いて、日本語の答えと中国語の答えを比較することもできる。日本語と中国語のことば使いや言語の違いを理解することができる。

休みの間に、よく競技かるたをやっている子どもの姿を見ていた。子どもたちは楽しいカードゲームから、日本の文化を経験しており、日本語の練習や和歌あるいは漢詩もできる。すごく良いゲーム勉強法と感じていた。

このような方法から、これから異文化交流や外国にルーツを持つ子どもへの支援などを踏んで、今後の実践を進めていきたいと思う。

「学びを得る」こととは何か

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

長谷部 瑞季

これまで私たちは、金曜カンファレンスで、全員が一つのテーマについて追求し、意見交換をしながら問いを解決していくという形を取っていた。11月のカンファレンスでは、いよいよ一人一人が興味・関心を持っているテーマや、問題意識を持っているテーマを決め、そのテーマについて共通の要素を持っているメンバーと集まり、テーマを探究していく活動に入る。

私は、子ども達と関わる中で、いわゆる「気がかりな子」の存在を意識させられる機会や、どのような支援ができるかについて考えさせられる機会を多く得たように感じる。このことについて、気がかりな子を支援する際にはどのようなことが必要であるか自ら考えた中でさらに検討したいと思ったこととして、「気がかりな子」とされる児童生徒や発達障害、およびグレーゾーンの児童生徒は、物事をどのように捉えているか、及び認知の違いによってどのような生きづらさが発生しているか、及びグレーゾーンの子どもの支援する現状はどうなっているかの実態調査をすることを考え、「気がかりな子視点」から見た支援の方法をより深く探っていくことを一つの道筋として考えた。

また、11月の月間カンファレンスで議題に上がり、これから一層深く考えていくことが必要であると改めて考えさせられた視点として、児童生徒が「学び」を得ることができるためには、どんなことが必要であるかが言える。

パルダマ栽培の実践例をグループで検討する中で、「活動の価値」が議題として上がった。パルダマ栽培

の実践では低学年の先生と協働できなかったことが問題点として挙げられていたが、低学年の先生が実践に協力することに消極的であった理由として、活動の価値が示されていないことがあり、私はこのような子供主体の実践における価値とはどのようなものであるかについて、改めて考えた。

私は現在、附属義務教育学校の2年生の学級に入り、子どもたちの活動を見取っている。その中で、社会創生プロジェクト(社創)を見取る機会があった。学級ではその時新たなプロジェクトが始まる段階で、子どもたちがどのようなことをするのかについてアイデアを出し合っている時間であった。

今回の月間カンファレンスの中で「活動の価値」について検討した上でこの子どもたちの活動を見直すと、「活動」のゴールをプロジェクトの終わりとするのではなく、さらに先を見据え、3年生以降のプロジェクト、及び子どもの実生活の中でプロジェクトを通して得たことが落とし込まれることが想定された活動であったと言える。子どもたちの中でプロジェクトを通して得たことが自分なりの言葉や行動として落とし込まれ、日々の中で活かされて、子どもの一部になる事によって初めて「学び」になるのではないだろうか。

このような、活動を通じて知識それそのものが得た形だけではなく、多くの場面で柔軟に子どもの中に落とし込まれる「学び」を得るためにこれから私が意識すべき事として、インターンという教師に近い立場から子どもと関わる自分自身も学び続ける事が必要であると考えさせられた。

コミュニケーションとは優しさをあげること

授業研究・教職専門性開発コース2年/ 福井市中藤小学校 中村 七海

私は今回の月間カンファレンスを通して、「コミュニケーションの取り方」について考えることができました。

まず、話題提供をしていただいた青山先生のお話をお聞きしました。「公開保育」の取り組みについて特に印象に残ったことは、研究会の場で「二段ベッドに見立てて机の上で寝ている子どもについて、倫理観で注意をするべきか、遊びを保障するべきか一緒に考えてほしい」と提案したということです。どうしても発表の場になると「良いものを見せなければ」という思いになりがちだと思います。しかし、あえて、園での悩みを打ち明けることで自分たちの保育に生かしていたところがすごいと思いました。がんばってがんばって良いものをつくろうとする過程も大切ですが、悩んでいることを打ち明けて一緒に解決してもらうことも大きな学びになると思いました。

グループの中では船谷先生と岩本先生と対話をしました。人数が少なかったこともあり、ファシリテーターの船谷先生のお話も聞くことができてとても良い時間でした。岩本先生の探究に関するお話では、探究について大人に理解してもらうための工夫がとても印象的で、年配の先生は、子どもの提案に対して「それは無理や」とか「どうせ人が集まらん」とか否定的な指導をすることが多かったらしいのですが、そこでまずは「全ての生徒に対して肯定的にコメントをしてあげてください」とルール化したり、「うまくいかないのはよくわかるけど、うまくいかないというのは、子どもにやらせてみて気付かせたいんです。生徒が経験、実践できるような方向にもって行ってほしい」と声を掛けたりしたとのことでした。それを言われた年配の先生も嫌な気持ちにならないと思うし、美方高校はMT(美方タイム)という時間を設定しているので部活には影響しないという話を聞

いて、その工夫は部活を大切にしている先生方にもとても良い工夫だと感じました。

話し合いの中で、伝え方、言い方の大切さについて考えました。研究会でなかなか悩みを提案する勇氣は湧いてこなかったとしても、研究会で意見を言う立場の人間が「私なら～する」や「個人的には～思う」、「この子どもを見ていてこの子にはこの時こんな声掛けが良かった」などという意見の押し付けにならない言い方が本当に大切だと感じました。また、中藤小学校の先生も言っていましたが、「コミュニケーションは優しさをあげること」であるので、そこについては自分も意識したいと思いました。

午後は、魚見さん、村橋さん、千田先生、大正先生、河合先生と対話を行いました。私は前から教員の1年県外派遣にとっても興味があったため、千田先生と一緒に話すことができて本当にうれしかったです。埼玉県から来られた千田先生は「福井県の学力の高さにはどんな秘密があるのか」について着目していました。埼玉県と大きな差があるわけではなく、考え方に違いを感じたとのことで、福井県の先生は子どもの姿から授業を考えたり、子ども主体で授業を進めたりしていると分析していました。成果の発表会でも、システム的な大きな違いではなく、普段の小さな違いを発表したいとおっしゃっており、私自身も県外でどのような教育をしているのか、とても興味を持っているため、現場に出たら、ぜひチャレンジしてみたいと思いました。

村橋さんは金曜カンファレンスについて話をしていました。いろんな人がいるので協働が難しいという話をされていてとても共感をしました。金カンにすべての力を注いでいる人もいれば、そうではなくコミュニティの一部にすぎない人もいます。私も常に予定が詰まっているため、会議が伸びたり、会議が増えたりすると対応しきれなくなってしまうのが現実

です。自分の事情と会議とをどう両立させていくのかが自分の中でも課題です。しかし、午前中で学んだ「言い方」には注意しないといけないと再確認しました。

また、長期実践報告書について、大正先生から、「学級経営について書くときにどのようなことを教師が言っていたのかも大切だけれど、時間軸も意識するとよい」というアドバイスをいただき、その2つの要素を長期実践報告書にどのように入れていくかを考えて執筆を進めていきたいと思っています。

灯台もと暗し

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高等学校

酒井 俊典

11月の月間合同カンファレンスでは、伊良部島の儀間先生からの話題提供があった。

パルダマという島の植物が違う地域では違う呼び名で根付いていることから、石川県や熊本県の子どもたちとオンラインで交流することとなった。最初はあまり活動が軌道に乗らなかったようだったが、徐々に課題が子どもたちにとって自分事になっていき、やらされ感のない活動へと変わっていったという。

子どもを主体とした学びが広がっていると感じた私が、ふと自分を振り返ったときに普段の自分の日常に違和感を覚えた。“最近、何を考えて日々を過ごしているのだろうか？”と。

ここ最近の私は丸岡高校でのインターンシップや大学院でのカリキュラム実践研究のいずれにおいても目の前の子どもを主体に見ることが出来ていなかった気がする。

カンファレンスのグループセッションの中で、9,10月のインターンシップのモチベーションが下がったという声を漏らした院生がいた。自分にも当てはまることだと思った。授業参観の時も、夏季に行った附属義務教育学校後期課程での教育実習では毎授業の参観で子どもの姿を追っていたのに対し、インターンシップ先では参観授業の教師の動きばかり見

ていた。これは記録の取り方にも顕著に表れていた。記録の中に出てくる子どもの姿やそれに対する自分の考えが少ないのだ。今一度、インターンシップ先での授業の見取りについて考え直さねばならないと感じた。

カリキュラム実践研究においても教科横断的な授業開発を目標としている私の現時点で完成した授業は授業者である私がやりたい授業であり、子どもたちの学びの場が設定されていなかった。

今回の月間合同カンファレンスのテーマである「他校に学ぶ」をキッカケに10,11月是他校の研究会や公開授業に多く参加した。その先々で子どもの学びの姿を見取り、その姿を根拠に他校の先生方と語っていたのにもかかわらず、自分が作り上げた授業は生徒目線の自分から始まったのにもかかわらず教師としての自分の自己満足の塊だった。

カンファレンス中のグループセッションでファシリテーターの先生から5つの目についてのお話があった。目の前のことに集中する“虫の目”、目標を決めるための“野獣の目”、反対から見てみる“コウモリの目”、時代の流れを読む“魚の目”、全体を見る“鳥の目”の5つだった。その先生曰く、初任の教師としてコウモリの目までは持っていた方がいいとの

ことだった。今の自分は、目の前の子どもを見る虫の目すら持てていなかった。

また、ある院生からは人との距離感や人への興味が無いと縮まらないという指摘があった。全くその通りだと思った。今振り返って見ると確かに、インターンシップ先の目の前の子どもに対する興味が薄れてきていたように思う。目の前の子どもからどうしてか目を背けていた。なぜ、このようになったのかは今考えても分からないのが正直なところだが、この理由についてもしっかりと省察しなければと考えている。

今回の月間合同カンファレンスとカンファレンスに向けて参加した他校の研究会や公開授業から痛感したことは遠くの大きな目標を見過ぎて目の前の子どもに対して、灯台下暗しになっている自分の未熟さであった。

これらを受けて、今後はインターンシップ先の子どもや目下の目標についてしっかりと目を向けて、スモールステップで物事を捉えていこうと考えている。そして、それを基にして徐々に大きな目標や目的に向かっていこうと思う。まさしく、探究的な学びを私自身もしていかなければならない。学び続ける教師像とはこのようなことなのかも知れない。

11 月カンファレンスから

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

多田 朋生

早いものでもう12月、年末である。長期実践報告書を執筆して卒業する日が迫っている。長期実践報告書を執筆しようとしたが、全くと言っていいほど何を書いて良いかが分からなかった。書くために何をして良いのかも分からず、ただただ時間が過ぎていった。11月カンファレンスは長期実践報告書についての相談、話し合いができるということで、他の人からの意見を参考にしようと思って臨むことにした。

11月カンファレンスでは、午後からが長期実践報告書についての話し合いのための時間が設けられていた。何を話したらよいか分からなかったが、とりあえず現段階で考えている長期実践報告書の構想を話すことにした。構想としては、大学院入学までの自分、1年目の丸岡南中学校でのインターンシップ、非常勤講師経験について、2年目の附属義務教育学校後期課程でのインターンシップ、非常勤講師経験を書き、最後に現段階で教育について考えていること、これからの展望について書こうと思っていることを話してみた。言葉に出してみると、だんだんと書くこ

とが自分の中で見つかってくるのだが、まだ自分の中で長期実践報告書をどう書き進めていくかの構想が固めることができなかった。グループが同じだった森川先生、帯川さん、伊達さんが自分の話したことに対して、質問をしてくれることでだんだんと自分の話したことが深まっていった。自分だけでは深まっていかなかったことも、他人からの意見をもらうことで、深まっていく感覚があった。今までの自分は、ここまで人の意見が大切だということには気が付いていなかった。カンファレンスで様々な人と話し合うことは多かったが、自分の話したことが深まっていく感覚が分かってきたのは、最近のことであった。このことに気が付いただけでも1年目の自分と2年目の自分を比べると、少しだけでも成長してきたことがなんとなくわかった。

長期実践報告書についてカンファレンスを終えて感じたことは、今まで自分は長期実践報告書の一つの線としてとらえていたことがわかった。しかし、話し合いの中で、これまでに様々な出来事があり、その

一つ一つが今の自分を作っていたことが分かった。確かに、線というものは小さな点の集まりである。この出来事が今の自分を作っているという大きな出来事があったわけではない。小さな出来事が積み重なっていった結果、今の自分の教育観があるし、今現在自分がどのようなことを考えてそれを行動に移しているのかという結果がある。今現在自分は教職大学院にいて、非常勤講師もしている。これは、この出来事があったからというわけではなく、毎年毎年、小さな出来事がありその都度考えた結果今の自分が出来

上がっている。長期実践報告書も何か一つの出来事をただただ書いていくのではなく、これまでの自分の人生の中で何があったのかを綴っていけばよいのだという書き方の突破口が見つかった気がする。長期実践報告書の提出期限まであと少しである。今長期実践報告書を書いていると、人生を振り返っているようで楽しい。書くことを楽しみつつ、自分の事を振り返っていけると良いと思う。

「新たなものの見方」を「自分のもの」へ

ミドルリーダー養成コース1年/沖縄県宮古島市立平良中学校 前川 尚代

11月18日に開催された東京サテライト・ラウンドテーブル2023、東京サテライト院生として東京に直接出向くはずだった。しかし残念ながらオンラインで参加することになり、対面で参加するために用意したキャリアケースは、ボツンと部屋の隅っこに置かれていた。

しかしどうせまた東京行きが来るだろうから、このままキャリアケースを片づけないでおこう、また中身を入れ替えればいいや・・・という思いで、ラウンドテーブル当日をむかえた。

今回のラウンドテーブル開催に先立ち、松木健一先生のご講話で心打たれた内容があるので紹介したい。「人は協力し合うことで進化してきた生き物である」ということや、「他者を理解し、他者に委ね、他者を信じ、共有できるビジョンを見出し、時には誰かに従いそして時には他者をリードしながら分業体制を構築していくことが、今求められている」など、人は人と関わりながら支え合いながら生きていること。その意味がラウンドテーブルを体験することによって、実感できたのだ。

「ヒトの学びの原点は、協力し合うことにある」

「ヒトの進化の根幹をなす協働探究活動を通して、必要とされる課題を見つけ、果敢に挑戦する行動的な学び直しが必要になっている」

ラウンドテーブルでは、毎回違う方とグループになるが、何度か参加していくうちに顔なじみの方もいらっしやる。一人で考え込んでばかりいて、なかなか前に進めないでいる時、ラウンドで出会った方々との対話によって、終わってみれば心が晴れるという、何とも不思議なことが起きるのだ。どうしてそうなるか、考えてみた。やはり語り合う様々なストーリーの中で、共通点もあれば、相手の話を傾聴していくうちに自分事に置き換えながら考えていく。気がつけば、自分だけではない。ここにいるすべての方が仲間なのだ、と思えるようになる。画面を通して初めてお会いする方でさえ、「あれ、ずっと前から知っているような」という感覚になる。

11月のラウンドテーブルで、私は4回目の参加となった。同じグループには「さくら認定こども園」の伊藤仁美先生もいらっしやった。以前から一度お話ししてみたかった先生だ。この園ではすでに2歳から振り返り活動を実践しているという話題を耳にしたことがある。2歳の子ども達にどのような方法で振り返りをさせているのか。そして、振り返りは子ど

もも、大人も必要なことである、と再認識できた一日であった。さらに、それは毎日の実践であるということ。悲しい顔やうれしい顔の表情カードを持ちながら、「今日は楽しかったです。理由（わけ）は・・・」と続くという。毎日続ける中で慣れてくると、表情カードを2つ持って、楽しかったことや悲しかったこと、一日の中で過ごした様々な出来事から子ども達一人一人が感じたことを振り返るというのだ。かわいい子ども達の一生懸命な姿が目浮かぶようだ。この話を聴いて、なるほど・・・もしかしたら、この方法は「特別支援学級」においても実践できるかもしれない、と考えた。伊藤先生からたくさんのヒントを得ることができ、私の学びにつながっている。宮古島ラウンドテーブルに参加した経験もありになるという伊藤先生と、機会があればまた、語り合いたい。

グループ内の話題の最後は、「上質な問いとは何か」であった。それは、午後の「伊良部島小学校・儀間裕勝先生」による実践発表を聴いてどのように感じたか、から対話が始まった。「島野菜・パルダマを栽培する挑戦」で、ある日枯れてしまったパルダマを見た先生は、教師側から何か働きかけたのではなく、子ども達からのアクションを待っていた。「先生、枯れてるよ」の子ども達の気づきに対し、「枯れてるね。いつから枯れてるんだっけ？」とたった一言だけ返す。枯れさせてしまったことをきっかけに子ども達の探究への旅が始まったそうだ。大人も考えつかないような子ども達の自由な発想・新たな展開が大変興味深かった。ラウンドテーブルでは、「子ども達の

発想を教師が大事にしているよね」という話題で盛り上がった。次に各先生方のこれまでの実践から苦労話まで、それに対しての深掘りがなされるなど、時間があつという間に流れていった。

相手を信頼することで話せること、他の先生方からの話題でさらに広がる、深まる。これこそがラウンドテーブルの醍醐味ではないだろうか。ラウンドテーブルの終わりに東京サテライト校の福島昌子教授はこうおっしゃった。「相手のことを自分の考え方と違うなと思ったならそれこそがチャンスだ」と。また、「意見の違いではなく、価値観の違いに意識を向けると多様な意見の中から新たな発見やそれが自分のものとなり、どんどん生まれていく」

私は今、その魅力にはまっている。自分の中でラウンドテーブルに参加する前と後では、「なぜ、そういう思いになったのか」の「なぜ？」や「どうして？」を常に考えるようになったことが変化だ。

心にもし、10個のポケットがあるとしたら、5個だけは、自分自身の大事な中身。他の5つにラウンドで得たお土産をもらって、自分がもつポケットの中身と混ぜる。混ぜていくうちに、その中身は新しいものになっているかもしれない。沖縄料理の「チャンプルー」のように・・・。

新しいものの見方を自分のものに変えられる、まるで「不思議な魔法」にでもかかってしまうこのラウンドテーブル・素敵なお出合いに心から感謝したい。

「他から学び、他を支える」意味

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 福井市社北小学校 水野 涼子

「11月とは名ばかり、あと数日で12月。12月はそわそわとした気持ちで、子供との関わりに焦りを感じる時期であった。それも記録があつてからこそ、気づいたこと。一旦立ち止まって・・・」という南雲

先生のあいさつから始まった11月のカンファレンス。焦りという言葉にはとつする。

ここまで進めてきたことにより私や私の周りを変容している事実、年内にもう少し先に進めたいという思いと期待、これらが12月という気忙しいさもあり

焦りとなる。カンファレンス前日に校内の掲示板に書き込んできたことは、焦りからくるものだったなと思い始め、焦ったなあ・・・と後悔。

11月の合同カンファレンスは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」がテーマであった。このテーマ、難しくはないか？私は、他校の研究から学ぶ機会がなかったが？と、テーマへの理解不足のまま、今回のカンファレンスは終了してしまった。このレポートを書きながら、もう一度テーマについて振り返る。

儀間裕勝さん(宮古島市立伊良部島小学校)より、4年生の児童との総合的な学習を通した実践報告があった。島ではあたりまえの「さとうきび」が、他県にとっては「自慢できるもの」であることから、他にもないかと始まった総合的な学習。島の伝統行事に参加したり島野菜のパルダマを栽培したりと活動が広がっていく。しかし、50株のパルダマが枯れて全滅することでいっそう活動が広がる。子供たちが言い合いをしているうちに、自分たちの「知識不足」に気づく。儀間さんは、言い合いと話していたが、「言い合い」もどうにかしなくてはいけないという「本音」であったに違いない。そこから探究が始まったのだ。「本音」で語ることによって、私たち自身もコミュニケーションも成長していく。それは、私が今一番実感していることだ。

カンファレンスでは、コースや校種・立場が異なる院生のグループ編成の中で、それぞれの学びや自己の実践を語り合うことを通して新たな視点を得たり、自己を振り返り考えを整理したりすることができる。それと同時に、お互いを支え合い、次への実践につなげていくための元気と勇気をもらう場である。アドバイスはほしいがもらえるとは思っていない。自分の思いを言葉にして語りことや他者の実践を聴き合うことが互いの学びになると思っている。その場で紡がれた言葉や思いが「他(校の研究)から学び、他(校の研究)を支える」の学びそのものにつながる。他校の研究會に出かけていない私は、今回のテーマをそういう意味でとらえたい。

午前後半は、「他校の研究で学ぶ…」に囚われていたため、語ることができなかった。グループの参加者の省察とその語りに引き込まれ、理解できない自分が情けなく感じた。今ならば、「他から学び他を支える」に焦点化して自分の実践について語ることができる。

本校に限らず、先生たちはとにかく多忙である。他校の授業実践や研究協議會に参加することは、学級・学校を離れるため、学びも多いが負担も多い。それならば、校内で日頃から学び合うことができる、つまり授業研究会を充実することが一番手取り早く負担もない。これまでの本校の授業研究会は、提案側も参加側も「やらされ感」満載の負担でしかなかった。それは、授業者を決める時の嫌な雰囲気や一授業公開や授業研究会ができない言い訳から明らかであった。しかし、提案側の思いや願いを大切に、参加側も子供の姿を見取ることを中心に語り合うとシフトチェンジしたことにより、授業研究会の雰囲気もずいぶん変わってきている。校内研修コンサルタントや教職大学院の先生方に関わっていただき、「刺激」をいただいたことも大きい。また、これまでなかった振り返りも「自身の学び」に焦点化し、共有のエクセルシート形式にしたことで、全員がそれぞれの学びを見ることができるようにした。おかげで、先生たち一人一人の思いがよく見えるようになった。「もっと授業をよく見とれるようになりたい」「子供の姿から授業をつくっていきたい」先生方の振り返りや前向きな姿に応援したい気持ちと感謝の気持ちでいっぱいになる。

少しずつ授業研究会の雰囲気が変化してきた最大の要因は、「子供の姿から見取ったことを『語り合う』」を研究協議會の中心にしたこと、校内研修コンサルタントや教職大学院の先生方に関わっていただいた「刺激」の積み重ねであろう。

今後、校内授業研究会が、授業提案側も参観側も互いに学びになる、そしてこれからの互いの学びの支えにもなることを期待している。また、関わってくださった校内研修コンサルタントの先生方や教職大学院の先生から「私たちにとって大きな学びとなり

ました」という話を幾度となく聞いている。これから
も「他から学び、他を支える」関係でありたいと願う。

来週は、中堅教員の一人が自主的に授業公開をする
ことになっている。これまでの経験を生かして、今
回のテーマである「他から学び、他を支える」授業研
究会にきつとなるだろうとわくわくしている。

語り合う

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/ 坂井市立丸岡中学校 日芳 浩介

「今回はどの先生と、どんな語り合いができるの
だろう。」

月間カンファレンスの数日前、少しわくわくしな
がら送られてきたグループ表を開く。教職大学院に
おける、県内外、様々な校種、立場の方との語り合い
は、私にとって大変有意義な時間となっている。

とはいえ、最初からそう感じていたかというとい
決してそうではない。昨年度は事前履修生として夏期
集中講座に参加したが、緊張して、しどろもどろにな
りながら最初の3日間のサイクルを終えた。なぜな
ら、私には自信をもって人に語るような確かな実践
など一つもないと思い込んでいたからだ。しかし、自
分がやってきたこと、思っていることを語っていく
中で、自分の実践の価値を見出すことができるよう
になってきた。それは、過去の自分を振り返る、つま
り過去の自分と対話することで、あらためて価値に
気づけたのだと思う。また、聴き手である方々が語り
合いの中で価値付けてくださることもある。「学び合
うコミュニティ」での語り合いを繰り返していくう
ちに、多少の緊張感はあるものの、いつしか月間カン
ファレンスに参加することが楽しみになってきた。

11月のカンファレンスを終えて、ニュースレター
の原稿を書く。ずいぶん前から分かっていたことで
あった。カンファレンスを終えたら、すぐ書こう、そ
う意気込んでいた。しかし、気がつけば原稿締め切り
の1週間前。さて、何を書こうか。パソコンの画面と
にらめっこをするが進まない。そこで、カンファレン

スのメモを取り出す。「実践して、書いて、語る。こ
れに勝るものはない」午前のグループセッションで
同グループだった先生の言葉が目飛び込んでくる。
授業研究についての話題の中で出てきた言葉である。
数年前の私だったら、あまり響いていなかった言葉
であろう。しかし、語り合うことの意義や心地よさ
を感じている今の私には、強く共感できる言葉である。
実践して終わりではなく、記録して語ることで、省察が
でき見えてくる価値がある。また、今回のカンファレ
ンスのテーマであった「他校の研究を支える意義」と
重ねて考えてみると、自分が見た他校の授業のこ
とを、自分の学校の仲間に伝えていくことが、他校の研
究を支えることにつながっていくのではないだろう
か。やはり、語ることは大切だ。

午後からのセッションは長期実践研究報告書の構
想を語り合うものだった。この執筆にあたり、構想を
練っていたが、なかなか頭の中で整理がつかず悩ん
でいたところであった。今回のグループセッション
で、自分の中の漠然とした思いを言葉にして語って
みた。以下はその一部である。

「私には、通うのが楽しい学校づくりという大き
なテーマがあります。担任時代のこと、学年主任をし
ている今のことを書きたいと思っています」「日芳先
生が考える楽しいってどんな楽しさ?」「友だちとい
うことが楽しい、行事が楽しい、部活動が楽しいなど、
たくさんありますが、教職大学院で学ぶ中で、学ぶこ
とが楽しいということもその一つだと考えるように

なりました」「学ぶ楽しさに気づいた転換点はいつなの？何があったの？そこは読み手として興味があるところだよ」

同グループの先生方から、どんどんご感想やご質問がいただける。自分の思いを語り、相手の思いに耳を傾け、また、自分の思いを語る。このような過程で、漠然としていたものが、少しずつはっきりとしたものになっていく。わずかであるが明るい兆しが見えたように感じる。これも、やはり語り合いの中から見えてきたものだ。

今後長期実践研究報告書を執筆していく過程で、自分自身との対話が続いていく。立ち止まって考え、また立ち止まって考えの繰り返しになるだろう。書

き終えることができるのか、甚だ不安であるが、自分を成長させるまたとない機会でもある。過去の自分を振り返り、現在の自分をしっかり見つめ、そして未来の自分を思い描きたい。私が書いた記録を、今後どなたかが読んでくださり、語ることで、その記録は時間を越えて生きてくるはずだ。

教職大学院で学び合う先生方、学生の皆さん、残りわずかですが、お互いの思いを大いに語り合いましょう。繰り返しになりますが「学び合うコミュニティ」に語り合いは欠かせません。語り合うことで、共に学び共に成長していきましょう。今後ともご指導をよろしくお願いします。

他校の学びに刺激されて

学校改革マネジメントコース2年/ 福井県立武生高等学校 伊藤 貴子

幼保連携認定こども園和田こども園の青山憲枝先生の発表「経営母体の異なる私立3園の公開保育の取り組み」では園長を中心にミドルの存在を生かした園の変革が行われていることが伝わってきた。安全第一の管理的な保育から、「子ども主体の園に変えたい」という思いから、互いの公開保育の中で、園同士が応援し合う関係になっていて、その園同志のコア的な役割を和田こども園が担っているように感じた。それは、他園が和田こども園の取り組みを参観することで、「その話題や問題意識を自園でも語りたい、考えたい」という起爆剤になっている点に表れている。

しかし、和田こども園での公開保育がスムーズに先生方の学びあいの機会になったかというそうではない。「仕事量の多さに辟易」「この期に及んで仕事を増やしてくれるな」「今までやってきた保育が間違っているのか」という先生方の不安や率直な反応、「他園は少人数だから、施設が充実しているからできるけど、うちは…」と、できない理由を探すという

反応は何かを起こす際どの集団においても見られる初期の反応だろう。そのなかでも、めげずに粘り強く実践を積み上げる中で、「ここがよかった」という声をもらうことで個々の教員が認められる機会になり、公開保育への肯定感が高まっていくという変化が生まれていく。そして、「やってみて駄目ならば戻ればよい」という取り組みへの捉えにより、「挑戦」への心理的な壁が少しずつ取り払われていく。

公開授業の場では、児童や生徒の反応を見取り、教員の支援のあり方を検討することが大切だと考えるが、M1の松田さんが「先生方の授業を観ていると、どの授業もすばらしく観えて、どこからはじめればよいか迷う」と述べていたが、まずは、その学びの場にどのような良さがあったかをふまえたうえで、NITSの目見田さんが「寄り添いながら聞き、それを聞く中で、自らの問いが生まれ学びあうという形の研修を目指している」とおっしゃっていたように、課題や問題また「揺さぶられた場面」「問いが生まれる場面」をもとに、語り合うことで省察を深め、実践に

生かしていくことが重要だと改めて考えさせられた。遊びの中での倫理観VS遊びの保障という例に表れる価値観の葛藤や対立は例えば自由をどこまで許可するか、どこまで学びを生徒に委ねるかといった問題として高校でも見られる。しかし、その「迷いや葛藤も含めて観てもらいともに考えていこう」とする公開授業のあり方は、ともすると、「取り繕い」や「見栄え」にこだわり、なにか観てもらった限り「お土産を」と必要以上に気張ってしまう「公開授業」の心理的負担感の正体を克服できる一歩でもある。

和田子ども園の保育を参観した先生の「今しかないという遊びの保障は大切で、子どもたちは本当に楽しそうだが、でもやっぱり机の上に乗るという行為は認められない、という感情が湧き上がり混乱している」という率直な意見が紹介されていたが、幼児の地続きの中の学びの中で「学びのねらい」を教員が共有化し、教員が「縛られている観念や価値」の正体を明らかにし、「その場の学びにおいて本当に大切にすべきことは何か」について考えることや、外に出て「自分が当たり前だと思っていることを一つひとつ考え直す機会」をもち、自分を揺らし続けることの大切さに気づかされた。

また、10月に武生東高校の三津谷先生の『こころ』の授業を通して、教師が提示した学習課題や問いをもとに、生徒が「新たな自らの問い」を形成していく授業プロセスは、学びが重層的に発展し、開いていく「深い学び」への機運があるように感じられ示唆に富んでいた。以前のカンファレンスで話し合った「教師の問い」と「生徒の問い」が重なり合う瞬間に探究的な学びが始まり、深まりを見せるということを思い起こさせた。このような教師が提示した問いをもとに、生徒同士が対話することで、生徒自らが問いを発見していくような授業がしたいと思っていた折しも、地歴公民科の室井先生から「先生、横断授業一緒にしてみませんか」と声を掛けていただいたのだ。室井先生は1年2組の担任として、日々、生徒との対話を大切にしながらクラスづくりをされていた。私は国語の教科担任として、生徒の学びの様子を日々室井先生に伝えていた。ある女子生徒が古典文法の

入り口で躓いたのを感じ、「もし、よかったら、放課後やり直してみない」と声を掛けるともう一人の生徒と素直に応じ学び直し、その生徒は一步霧の中から抜け出したということがあったのだが、そのことを保護者の方が保護者会で「どうして娘が困っていたことに気づかれたのか」と室井先生に伝え、室井先生が私に返してくださったこともあり、そういうやり取りが増え信頼関係が築かれていった。「是非やってみたい」と返事をさせていただいて、「ではどのように課題を提示するか」という話に進んだ。8月に県の渡辺久暢先生を招いて進路学習会を本校で開催したのだが、室井先生は「その学びを生かしたい」とおっしゃって、「これからの推薦入試にも対応できる力を身につけたい」とおっしゃった。そして、平田オリザ氏の著書『22世紀を見る君たちへ』に触れ、そこで展開されている教育を実践してみたいということだった。「私もその本なら読んだことがある！」と演劇部の顧問も担当していた私は「身体に落とす」「他者の身に自分をおいてみる」という演劇的手法にも興味をもった。何をテーマにするかについては、「食というテーマではどうか？」と投げかけられた。1年2組の生徒が興味があり、身近で、多面的に捉えられ、これからの社会においても重要な課題を多く含んでいる。「家庭科の島田麻里先生にも話をしている」ということだった。テーマについて賛同し、「武生東では、福井工業大学の生徒に来てもらって、培養肉の実験をしたことがあるよ」などそれぞれの経験を話し合い語り合う中で、「代替肉」という一つのテーマに落ちていった。9月のPTで「教科横断」をカリキュラムとして結べないかという取り組みを行っていた。実はその場でも、室井先生と対話が進み、教科軸に目をおくと「どうしても内容的な結びつきになってしまう」ということが論点になっていた。私は大学院での学びの中で教科横断の課題にも触れていた。「教師主導の、教師がわくわくする教科横断から生徒に身につけたいコンピテンシーで結びつく横断授業への展開が必要だ」と伝えた。島田直子先生もこの点をこのPTの際に強調されたのだが、「教師が生き生きと語ることは生徒の好奇心に火をつける」という文脈の捉えがまだ多いように感じられ

た。しかし、室井先生は、そこに耳を傾けてくださって、どうすれば「コンピテンシーとして連携し合えるか」という点において対話する中で「探究の月間の目標を意識した授業づくりを進めるというのではどうか」と提案してくださったのだ。私は、「それだと各教科の特性を生かしながら授業できる」と納得し、教科担当の先生方にその方針を賢者メッセージを通して共有していただいた。このようなやり取りを行っていたので、今回の連携授業でコンピテンシーを「ファシリテーション力」に置くことは3人の中ですぐに共有できた。それぞれが、1時間ずつ教科の特性をいかした学びづくりをした上で、生徒同士の対話を通し、生徒自らの問いが生まれる機会を大切にしたい。リフレクションシートを1枚にし、多様な視点からの迫り方の中でもつながりが生徒に見やすいようにした。放課後の短時間、3人で集まり話し合いを行い、決定事項や、気づきは賢者メッセージでやり取りして、それぞれの授業を「見える化」して共有し、少しでも参加できる場合は授業にも参加し合い、生徒の様子を見取った。そして、「代替肉は人を幸せにするか」というテーマの下、「中学校の給食でゲノム編

集をした代替肉のメニューを導入するか否か」について利害関係者を考えさせ、合意形成していく過程をロールプレイするという学習活動を設定した。その後、食について考えた問題提起により小論文を書き、個の考えの形成と表現につなげた。

一連の学びの中で、「幸せかあ」とつぶやき、幸せとは何かについて考え直す生徒や、「肉屋にも代替肉をおいたらどうなるのか」など考え直したり新しい視点をもったりした生徒、「安心が保障されないということだけで、とまってしまっただけでは、科学の発展はとまってしまうのでは」など葛藤に身をおく生徒たちがいたことは印象的である。また、国語の授業で鋭い発言をする固定的な生徒だけでなく、普段、私が見落としていた生徒の発言や考えに目が留まったことも収穫である。参観してくださった高志中学校の中山恵理子先生は、生徒の発言を捉えて、詳細な見取りを返してくださった。このような生徒の見取りに熟知している先生に観て頂けることは学びが深まる。このような取り組みを少しずつ増やしていければと考えている。

施設類型の違いを越えて学び合う

学校改革マネジメントコース2年/ 滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 村地 和代

園の保育では、子ども達は、日々の遊びや活動の中で、子どもが心を動かし、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また、心を動かすというサイクルが展開していくことを通して、学びが繋がって深まっていく。

宮古島市伊良部島小学校の儀間先生の御実践における子どもの姿は、まさに、そのような姿であった。当初、子どもたちが設定した学習のゴールは三つ。①パルタマを栽培すること ②自分で食べること ③パルタマの良さを知ってもらい広げることであったが、このゴールを達成しても子どもたちの探究は途切れることはなかった。さらに、自分の「～したい」

気持ちがあふれ、一人ひとりの興味・関心がさらに広がり、探求のサイクルが多重に展開していた。このような経験をした子どもたちは、学ぶことは楽しいと実感し、さらに、知的好奇心を働かせ、次の「～したい」へ向かっていくのだと思う。

現在、進めている幼保小接続事業では、幼児教育でも小学校教育でもこのような探究のプロセスを大切にしたいと、「滋賀県版学びのサイクルデザインシート（通称：ぐるぐるシート）」を開発した。子どもの発意をもととした“子どもの心が動く”子どもの学びのサイクルを意識することで、実質的な保育・授業改善につながる。本シートは、螺旋状の図を中央に位

置付けており、子どもの思考を吹き出しで図の中に記載し、思考がどのように展開していくのか予想するシートである。その予想をもとに、環境構成や単元の工夫、指導者の援助を構想するものとなっている。

ぐるぐるシートを使った先生方は、「これはとてもよい。子どもの思考の流れを捉えるのにとってもわかりやすい」、「他の先生と子どもの様子を共有できる」、「保育指導案の代わりに活用しているが、保育指導案を書くよりもたのしい」、「子どもの気持ちを考えながら吹き出しを考えるのがおもしろい」、「予想した姿がでてきたら『やった！』と思う」、「担任の子どもの発達の見取りが変わった」、「先生の力がついた」と、声をいただいている。

また、園と小学校における保育指導案と小学校学習指導案は様式が異なっており、小学校においては、保育指導案を読み解くのが難しい傾向にあった。

今年度は、デザインシートを保育指導案・学習指導案代わりに活用することで、指定校園の先生方は、施設類型の違いを越えて保育・授業案検討を行っている。私立認定こども園と公立幼稚園での語りでは、「長いスパンで遊びのプロセスを一緒に考えること

で、2学期の保育に向けての手掛かりを得ることができました」小学校と保育所との語りでは、「園での遊びの展開を知ることで、小学校の生活科の手掛かりを得ることができました」と、感想が述べられた。横のつながりと縦のつながりの中で語り合うことで、自園・自校の保育・授業改善の手掛かりを見出すことができる。

保育・授業をデザインしたなら、実践し、振り返ることが大切である。どのような姿が育ちつつあるのか、ともに保育・授業を見て、その子どもの姿を丁寧に捉え、具体的な姿を通して、保育・授業での流れや構想を語り合うことを大切にしたい。

校区・地域の現状や各園・校の想いも違う。当然、保育者・授業者の想いも様々である。違うから分かり合えないのではなく、違うからこそ、互いに学び合うことで、次の手立てを見出すことができるのではないかと思う。保育・授業の正解は一つではない。施設類型の違いを越えて共に探究的に学び合うことで、保育・授業づくりは楽しいと感じてもらえるような幼保小接続を進めていきたい。



トピック～第9回エジプト研修を終えて

エジプトにおいてはEJS（エジプトジャパンスクール）の建設が進められ、特別活動を中心とした日本型教育を導入しています。教職大学院ではこうした先進的な教員養成のプロジェクトを委任され 2018 年から、毎回約 1 か月の長期に渡って研修を行っています。すでに 8 期までの研修を終え、今回は 11 月 20 日～12 月 15 日までの約 4 週間、第 9 期の研修が行われ、今回は「授業研究」をテーマとして、40 名の研修生が参加しました。5 人ずつ 8 つのグループに教職大学院スタッフがファシリテーターとして丁寧に寄り添い、ともに学びを深めてきました。この 1 か月で、どのような学びが彼らの中に残ったのでしょうか。閉講式での研修生代表のガーダサイドさんの言葉を掲載します。

皆様、こんにちは。

PMU と研修員の先生方を代表して一言、ご挨拶いたします。まず、エジプト日本パートナーシップの一環であるこの研修を支えてくださったすべての人に感謝の意を申し上げます。

この研修では日本人スタッフとエジプト人の先生方との間で、多くの情報交換や意見交換を行い、子供が主体的となる学びの場の中で、主体的な学びのファシリテーターとなる教師が、どのようにして充実した実践コミュニティをつくれるかについて、主体的に学びました。

また、探究型の学習における話し合いや意見交換の重要性、記録の重要性についても学びました。よい学びとは実践を通して、自主的に物事を理解することです。子どもは中期または長期的プロジェクトを発展させることを通して、探究型の学びを身につけます。子供は主体的、自主的に学び、目的や目標の明確化、責任のある決断力などのスキルを身につけることによって、段階的に自分を変える力、周りの人に影響する力をつけていきます。

このような力をつけることによって、自分の人生を形づくることができ、そのことが教師、保護者そして地域の人との良好な人間関係を築くことにつながります。

奈良の小学校の理科の先生がおっしゃっていた一言で、私の言葉を締めくくろうと思います。

「教師の役割は、教科書の内容を子どもに教えることだけではありません。子供は家で自由に教科書を読むことはできます。教師の役割は、教科書のカリキュラムから、人生のカリキュラムを子どもに伝えることです。子供は探究する力、つまり自分でたどり着きたい情報や知識を自力で見つけ出す力、そしてそれらの情報や知識を地域社会と結びつける力、これらを見につけて、学校を長期的に学びが実践される意見や経験の交換の場にすることが望ましいのです」

このことをしっかりと自覚しました。本当にありがとうございました。

実践し 省察する コミュニティ

*Round Tables:
Spring Sessions 2024
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

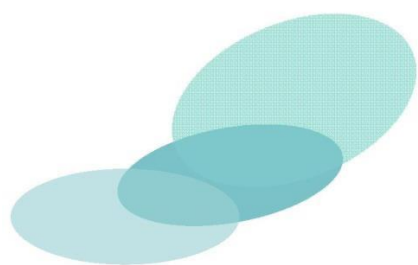
2024 Spring sessions

17(sat) 8:40-17:40

18(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）総合研究棟

online-offline hybrid sessions with Zoom



探究する学びを実現する教師
教師の実践力を培う学校拠点
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2024.2.17-18

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring sessions

The 24th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

2/17(sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために
学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人- (Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒- (Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える 6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校:子ども主体の学びを実践する学習コミュニティ
- B 教師教育:学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
—世代や立場を超えたつながりの広がりとは、どのようにして実現してきたのか—
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究:学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたをみんなで考える
- F インクルーシブ:「個」の視点から教育を再考する—子どもと教師の接面を探る—

2/18(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。
地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で
一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少し
ずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっ
くり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。
言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し
合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。
実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培わ
れていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。
次の URL から申し込み可能です。<https://forms.gle/QWjYtTatX3nEbaFML6>
- 2/18 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。
- 2/18 の session III の参加についてのお願ひ＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。
ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。
そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願ひいたします。
プログラムの変更等があり得ます。
最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2024.2.17-18

by FK 2022.11.11

Schedule

12/23,24,15 Sat. Sun. Mon. 冬期集中講座 A 日程（予備日 12/26）

1/5,6,7 Fri. Sat. Sun. 冬期集中講座 B 日程（予備日 1/8）

2/4 Sun. 長期実践研究報告会

2/17,18 Sat. Sun. 実践研究 福井ラウンドテーブル

3/14 Thu. 運営協議会（令和 5 年度第2回）



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。

ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。

修了生や関係機関の方の投稿也大歓迎です。

関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【編集後記】2023 年が終わり、新しい年がやってきます。皆様にとってどんな年だったでしょうか。世界は戦争、異常気象など他人事ではない不安でいっぱいです。一方で、最近の授業では、自分の意見を生き生きと語る頼もしい子どもたちの姿に感動することが多くなりました。この国は、きっと彼らが守る！その力を培うのは、教育ですね。2024 年、皆様にとって、よりよき年となりますように！
(M)

教職大学院 Newsletter No.177

2023.12.23 内報版発行

2024. 1.19 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp